

〈総 説〉

社会の心理学化と脳神経科学的な 知識の普及に関する研究動向

榎原 克哉

Abstract 本論は、社会の心理学化論と、21世紀の社会において関心が集められてきた脳神経科学的な知識の流通に関する社会学的研究の動向を要約したものである。社会の心理学化論については、その理論的潮流とそのなかで論じられてきた「心理学」の意味内容、さらには心理学化論に対する批判的な論点を整理した。脳神経科学に関する社会学的研究においては、「心理学と脳神経科学の関係性」と「脳を基軸とした自己とアイデンティティ」の2つの枠組みをもとに整理した。そのうえで、今後の理論的パースペクティブの展開と研究の展望について検討した。

キーワード: 社会の心理学化、脳神経科学、精神医学

1. はじめに

2000年代以降、日本の社会学では「社会の心理学化」に関する論考が蓄積されてきた。また、1990年から2000年にかけての米国大統領の宣言「脳の時代 (Decade of the Brain)」に象徴されるように、脳神経科学関連の研究の重点化ならびに公衆への啓発の強化も目指された。本論は、社会の心理学化論において議論されてきた「心理学」の内容を精査するとともに、同論に対する批判的論点を整理する。そのうえで、脳神経科学的な知識の流通に関する社会学的研究を「心理学と脳神経科学の関係性」と「脳を基軸とした自己とアイデンティティ」の2つの枠組みのもとで整理する。最後に、社会の心理学化論と脳神経科学に関する社会学的研究の今後の議論の展望を示すことにしたい。

2. 社会の心理学化論

2.1.1 社会の心理学化論の概要

社会の「心理学化 (psychologization) ¹⁾」は種々定義がある。その最大公約数的な定義としては、人々が心理学的な言語や思考を通して、自身や他者、社会状況を捉えるようになる傾向を指す。心理学化論の理論的源流として、P・バーガー (1965) の論文「精神分析の社会学的理解に向けて」が参照されることが多いため (森 2000, 片桐・樫村 2011)、これらに則してまずはその概要からみていきたい。

バーガーの「心理学化」に関する議論は、上掲した定義とほぼ相違ないものであるが、彼の問題関心は「心理学」のなかでも、とりわけ1960年代の米国で隆盛を極めた、精神分析という「特定の心理学モデル」に焦点が当てられている。精神分析的な人間経験の解釈や思考が、専門的・制度的な枠組みを越えて、なぜ広域に普及し、人々の日常に浸透するにいたったのか。この問いについてバーガーは、社会構造との関連から解き明かす必要と、その

ための視座を提示しつつ、具体的には産業化に伴う公的領域と私的領域の分化²や、官僚制の拡充といった社会構造の変化に、精神分析的な心理学モデルが普及するにいたった契機を見出している³。

社会構造が「心理学化」をもたらすという視座は、R・ベラーら (1985=1991) や森真一 (2000) の心理学化論にも引き継がれている。ただし双方の異なる点として、これらの論考は精神分析などの特定の学派や知識に考察範囲を必ずしも限定せずに、より広義の文脈で「心理学」概念を用いていることがある⁴。とはいえ、論旨そのものは共通する部分が多く、ベラーらは官僚制や経済における契約的で利益追求を重んじる思考や価値観が、個人的な生活世界に浸透する事態を「セラピー的個人主義」と呼び、それが対人関係の持続困難や共同体の解体をもたらすとして警鐘を鳴らしている。森も、対人関係上で過剰な配慮を要求する「人格崇拜」の価値観が根差した文化や、「マクドナルド化」に象徴されるような合理的な社会編成の進展が、「心理主義化」をもたらすとして批判的に論じている。これらの論考に通底するのは、「社会的なもの」の回帰を要請するといった規範的関心であり、セラピーによってではなく、社会的紐帯の回復によって孤独や不安に対処する必要性や、社会問題を個人の心の問題に還元してしまうことの危険性が論じられている。

バーガー、ベラーら、森の論考においては「心理学」の意味内容や位置づけをめぐって異なる点があったが、A・ギデنز (1991=2005) のセラピー論においてはこの論点が前景化するようになる。ギデنزは、P・リーフ (1966) の心理学批判を事例に、心理学やセラピーの一枚岩的な想定を問題視しつつ、これらの内部にも多様な知識体系や技法、学派が存在することを指摘する。そのため、複数の心理学やセラピーのなかから、特定のものを選択するといった行為には、積極的な意義が認められるべきであると主張する。さらに、セラピーが伝統的な権威を代替しつつ、人々の専門家依存を誘発しコントロールを強めるといった、個人化論やナルシズムの自己論 (Senett 1977=1991, Lasch 1979=1981) による批判に対しても、ギデنزは反論をくわえている。それによると、セラピーの普及は伝統や道徳の代替物といったものではなく、「ハイ・モダニティが生み出すジレンマや習慣の具体的な現れ」 (Giddens 1991=2005: 202) であるとともに、「新たな不安に対処する単なる手段ではなく、自己の再帰性の表れ」 (Giddens 1991=2005: 37) を象徴するものとして解釈される。「自己の再帰性の表れ」は、社会から逃避してナルシズム的な自己を追求するといった事態とは相反するものであり、むしろ「セラピーを受けようという決定は、エンパワメントを形成しうる」 (Giddens 1991=2005: 162) ものとなる。すなわち、複数の心理学やセラピーが競合して存在するなかで、それを取捨選択し試行錯誤する再帰的な自己が、ギデنزの再帰的自己論においては重視されているのであり、それは後期近代のなかで増大したリスクや不確実性に対処するために有効な方法としてみなされる⁵。

「心理学」や「セラピー」の複数性や個別性への着目——バーガーの「特定の心理学モデル」を対象とする議論への回帰ともいえる——は、ギデنزとは理論的関心を異にするものの、N・ローズ (1998, 1999) の心理学化論にも共通している。ローズは統治性 (governmentality) 論の文脈から心理学化を論じ、心理学的な知識や技法の選択や習得、自己適用といった行為の背景に、特定の目的の実現のためにプログラムされた集合的合理性の存在を想定し、そこに統治のメカニズムを読み込んでいる。そのなかで「心理学化」は、「人間に関する真実を形成・組織・流布する他の方法を制圧しさえしながら、心理学が真実を吹き込むようになる」

(Rose 1998: 59) プロセスとして定義し、「他の方法」との相対的な関係性に位置付けられている。さらにローズは、心理学化の進展が単線的なプロセスを辿るのではなく、心理学内部においても複数の知識や介入方針、想定する人間像が競合し、相互に影響を及ぼし合いながら生起することも指摘している。さらに、心理学化の影響下にある個人に関しては、自己の倫理(ethics)の問題として論じられる。ここでいう倫理の概念は、M・フーコー(1988=2004)の自己のテクノロジー論を受けたものであり、「特定の『自己のテクノロジー』という観点から、個人が自分自身および自らの人生を改善しようと試みる実践や、個人を改善へと導く願望や規範」(Rose 1998: 95)を指す。心理学的なテクノロジーが戦略的に導入される領域として、ローズ(1999)は4つの領域を指摘しており、第一に、仕事の主体化(subjectification of work)がある。「仕事の主体化」においては、仕事を単に収入を得るための手段として捉えられるのではなく、自己実現やアイデンティティを構築・維持するためのものとして捉えられ、心理学を通じて自身の感情や願望を精査する方法の習得が目指される。第二に、日常の心理学化(psychologization of the mundane)があり、これは恐怖や拒絶体験、強いストレスなどの人生上の出来事に適応するために、それらの引き金となる要因を特定、あるいはその影響力を日々見積もるべく、心理学に依拠する事態を指す。第三に、有限に対するセラピー(therapeutics of finitude)があり、いずれ訪れる死や愛する者との死別といった、人生の有限性を受け止めるための方法を心理学に学び、場合によっては専門家の援助を受けるといった事態を指す。第四に、社交の神経症化(neuroticization of social intercourse)があり、これは個人の幸福感や自己効力感や人間関係から生じるという前提のもと、人間関係を調整することによって心理的問題に対処することを指す。そして、これらの4領域に共通するのは、自律的自己(autonomous selves)の産出という目的であり、そのために適応的な行動や振舞い方の調整といったかたちで、「主体のある行動方法や存在のあり方を別のものに導くための、計算された試み」(Rose 1999: 249-250)が展開していくプロセスが、ローズの心理学化論の骨子であるといえる。

2.1.2 社会の心理学化論に対する批判とその課題

一方で社会の心理学化論に対しては、これまで複数の論者によって批判的検討がくわえられてきた。その内容を大別するならば、(1)心理学が「社会的なもの」を無視しているというアприオリな想定に対する疑念、(2)心理学化されていない状態を想定することの理論的な困難性、(3)心理学の具体的な内容や他の学問知・技術との関係性が曖昧なため、心理学内に生じた質的な変化(主要な理論や学説などの変化)を把握できないといった論点が挙げられる。以下、順にみていく。

第一の論点は、心理学が「社会的なもの」を無視ないし軽んじるといった主張を、再度批判的に検討するものである。その批判対象となる社会の心理学化論においては、本来社会的な問題として扱われるべき問題が、心理学化ゆえに個人の心理の問題に還元されることを、規範的な観点から批判するものが多い。たとえば先にみたベラーらや森のほか、小沢牧子(2002)も心理学化がもたらす「状況温存、ことなかれ思想、脱政治性」(小沢 2002: 202)を批判している。しかし、このような心理学化の想定が、現実に必ずしも即していないことが、複数の論者によって指摘されてきた(崎山 2008, 佐藤 2013, 平井 2015)。崎山治男(2008)は、社会の心理学化論が批判対象とする心理学が、実際には「社会的なもの」の無

視という批判に自覚的であったために、「社会的なもの」をも包摂する方針をとるようになったことを指摘し、これを「社会化された心理主義」と呼んでいる。そのため「心理的なもの」と「社会的なもの」の対置を所与のものとし、心理学化ゆえに不在となった「社会的なもの」を再要請するに留まるような社会学的批判は、もはや失効を余儀なくされる(崎山2008)。この崎山の指摘を受けて平井秀幸(2015)は、「社会学者は、実践のなかに『社会的なもの』を発見してそれを擁護したり、逆に『社会的なもの』の無視／不在を嘆くだけでなく(それは重要なことでもあるが)、それがいかなる『社会的なもの』であり、いかなる用いられ方をしている／していないのかを注視しなければならない」(平井2015: 234)と述べている⁶。他の例として、精神医療における「心理学化」を捉えた場合には、「社会的なもの」の無視とはむしろ逆の事態が、歴史的に生起してきたことも指摘されており、「歴史的に言えば、人間精神の病理を探求する知識体系(精神医学や異常心理学)と社会的要因論は密接な共存関係にあったのであり、決して対抗的な関係にあったわけではない」(佐藤2013: 24)ことが指摘されている。

このように「社会的なもの」の復権を心理学化への対抗策として無条件に想定することは、方法論的にも妥当性を欠く。そのため、心理学化が実際にどのように生起し人々に影響を及ぼすのかといった観点から、経験的な問いを差し向ける視座の重要性が指摘されてきた⁷。

「心理学化」と「社会的なもの」という理論的な対置構造に立脚せず、さらに後者が前者の欠如を補填するという想定も棄却するならば、第二の論点として、そもそも「心理学化」の影響を免れた人間の状態を想定することは可能なのかといった問題に逢着する(いうまでもなく、「心理学化」する以前の個人は「社会的」な存在だったというアприオリな想定にもとづく解答は無効である)。これにくわえ、第三の論点として、「心理学化」を構成する「心理学」を個別具体的にみるならば、ギデンズやローズがいうように、その性質の違いや競合関係も顧慮する必要があるのではないか、といった問題も看過できない。これらの論点に関しては、心理学者であり哲学者でもあるデ・ボス(2013)が詳しく扱っているため、以下ではその概要についてみていきたい。

まずデ・ボスの「心理学化」の定義を確認すると、心理学化とは「心理学的なシニフィエや言説的スキーマによって、典型的な二元論[引用者注：観察する自分と観察される自分という二元論]に基づく、近代的な人間を産出するプロセスであり、人々が学術的なもの、すなわち心理学化するまなざしを用いながら自分自身を省察するプロセス」(De Vos 2013: 11)を指す⁸。しかしその直後でデ・ボスは、上掲した定義がはらむ問題として、それが「心理的人間 (*psychological human*)」と「心理学化された人間 (*psychologized human*)」の対置という、素朴な二元論を前提にすることを指摘する。前者の心理的人間は、人間が本来“本質的な”心理を有しており、その心理は無媒介的に捉えることが可能と想定した、「心理学の根幹をなす神話そのもの」(De Vos 2013: 12)である。一方で後者の心理学化された人間は、心理的人間が心理学化された状態、すなわち人々が自分自身、他者、世界を思考し何らかの関係を結び結ぶ際に、学問的な知に根差した心理学に依拠する傾向を強めた人間像を指す。そして、両者の区別に基づく二元論の陥穽は、「はじめに心理学的人間がいて、その後心理学化された人間がやって来たのか？」(De Vos 2013: 12)という問いに表されるように、変化の時間軸的なプロセスが曖昧になるほか、両者の境界や区別も恣意的なものにならざるをえなくなるところにある。そのため、心理学化の影響を完全に免れた心理的人間を想定す

ることは、理論的に不可能になる⁹ほか、もしこれを不問に付したとしても、必然的にその空隙を埋めるような人間心理に関するメタレベルの科学的・学術的な説明を外挿せざるをえなくなる¹⁰ (De Vos 2013)。その最たる例としてデ・ボスが指摘しているのは「脱心理学化 (de-psychologization)」という事態であり、「現代の心理学は、遺伝子、神経伝達物質、認知や進化のメカニズムを対象とすることが多いようで、精神的な要因を本質とする立場から手を引くようになっていく」(De Vos 2013: 35) と指摘する。脱心理学化がもたらす他の学知の介在によって「心理的人間」と「心理学化された人間」の連結が解除される結果、心理学の意味内容も変化を被るということになる。この「心理学」の代替・変化の可能性という論点は、先述したローズの心理学化論にも通じるだろう。

このように「心理学」は一枚岩的なものではなく、性質を異にする性質を異にする複数の「心理学」から成り立つ¹¹ほか、心理学以外の学問知や技術とも相互的な影響関係にあるものとして位置付けられる。続いて、人間心理を脳のメカニズムから説明・理解する際に依拠される、脳神経科学的な知識の流通と社会の研究動向についてみていくことにしたい。

3. 脳神経科学的な知識の流通と社会学的研究

21 世紀の社会では、脳神経科学 (neuroscience) の発展とともに、脳およびそのメカニズムに関する知識や情報が一般の人々にも伝播した。その結果、認知・思考・情緒などの発生が、神経学・神経科学的な言語や説明に基づいて捉えられ、必要に応じて脳の状態に介入する技術が優先的に求められるような趨勢が議論されてきた¹²。関連する論考としては、脳神経科学的な知識や技術の発展にともなう人々の思考様式や価値規範の変化を理論的・歴史的に考察したものから、それをめぐる倫理の問題、脳を対象とする科学技術の適用が人々に及ぼす影響を経験的に考察したものまで、きわめて多岐にわたる¹³。すべての論考を網羅的に扱うのは本論の手に余るため、次の二点のテーマ、すなわち「心理学と脳神経科学の関係性」と「脳を基軸とした自己やアイデンティティ」に焦点を当てて検討していく。

3.1 心理学と脳神経科学の関係性

まず、人間を理解するうえでの「精神的・心理的なもの」への関心から「脳」への関心の移行というテーマについて、たとえば科学史家の F・ヴィダル (2009) は、脳に対する関心が世界的に高まった 21 世紀の社会動向を「ニューロカルチャー (neuroculture)」と呼ぶ。ニューロカルチャーの成立背景にあるのは「脳性 (brainhood)」の思考であり、「あなたとはあなたの脳にほかならない」(Vidal 2009: 6) といったフレーズに象徴されるように、これには「人間性 (humanhood)」と形容されるような要素群 (自由意志や自己決定など) が「脳性」に還元されていくプロセスを伴う¹⁴。「脳性」の思考は、脳神経科学を中心とする学問的な領域から娯楽的な領域¹⁵にいたるまで、広く浸透しているが、これらの共通点として指摘できるのは、人々の脳を調べれば、その状態や構造、機能等を把握できるうえ、脳の「所有者」の人格や行動パターン、個人的体験なども解明できるという基本的想定である (Vidal 2009)。ただし、ニューロカルチャーが強調するような脳還元論的な思考は、そのみで存立できるものではなく、実際は「精神的・心理的なもの」との相対的な関係性のなかで捉えるのを妥当とする指摘もされている (Ortega and Vidal 2011, Rose and Abi-Rached 2013)。

N・ローズとアビ・ラチド Abi-Rached (2013) も、オルテガとヴィダルと同様の見解を

示しており、自己を語り成形していくうえで、脳および神経生物学的な言語の重要性を認めつつも、「人間性 (personhood) が脳性 (brainhood) になったわけではない」(Rose and Abi-Rached 2013: 220) と明言している。とりわけその力点は、脳の「可塑性 (plasticity)」¹⁶ とそれに伴う個人の責任という問題に置かれている。それによれば、21 世紀において、脳は先天性というかたちで人の運命を定めるようなものではなく、外部からの影響を受けて変化するものとして想定されるようになったため、生涯を通じた可塑性に開かれたものになる¹⁷。そして科学史家の B・P・ルビン (2009) によれば、脳の可塑性という思考は、発達後の成人の脳は不変であるというドグマを打ち破り、成人後の神経発生の持続の促進や操作・介入等によって、再学習や再記憶の可能性をもたらす「治療の約束 (therapeutic promise)」を人々にもたらす。脳に働きかけるこのような治療的技術や手段の拡充は、必然的に自身の脳を適切にマネジメントする義務や責任を人々に求めるようになる (Rose and Abi-Rached 2013)。また、脳をマネジメントする責任は、(治療を受けるか否かも含めて) 当人の意志や判断、いわば精神的・心理的な領域に求められるため、神経生物学的な思考が心理学的な思考を完全に代替することは容易には起こりえないと彼らは指摘している (Rose and Abi-Rached 2013)。

3.2 脳を基軸とした自己やアイデンティティ

一方で、脳神経科学が人々の人間観や自己観に及ぼす影響力が拡大しつつあることもまた事実であり、これに呼応するかたちで研究の蓄積がなされつつある。文化人類学者・医学史家の T・リース (2010) は、電気生理学や分子神経生物学など、専門を異にする科学者を対象としたフィールドワークを通じて、「脳についての考えが異なれば、脳神経学的な人間の捉え方も異なりうる」(Rees 2010: 153) と指摘したうえで、先にみた脳の可塑性をめぐる科学的想定が、自我の一貫性や生き方などの倫理的な問題の捉え方にも波及すると論じている。また、科学者のみならず、一般の人々にも脳神経科学的な知識が影響を及ぼし、それを表す概念として「脳の主体 (cerebral subject)」(Ortega and Vidal 2011) や「神経化学的自己 (neurochemical self)」(Rose 2001) といった概念が提示されている。以下、順にみていく。

「脳の主体」は、神経科学の知識や技術、大衆文化、当事者運動などを通じて生起するが、それは実体的なものではなく、「脳の主体」へと変容していく動的なプロセスを指すものである (Ortega 2009=2015)。そのため、「脳の主体を分析するためには、その編成および個人が脳的な用語で自分自身をつくりあげる自己構築の実践に照準すべき」(Ortega 2009=2015: 191) であり、オルテガは実際に「自閉症文化の脳化」を事例に「脳の主体」を考察している。これによれば、自閉症の子を持つ親の団体および当事者団体は、1960 年代から現れ始めたが¹⁸、そのなかでは自閉症を治療対象とすることの賛否をめぐる論争、すなわち自閉症を疾患とみなすか、個人のアイデンティティとみなすかをめぐっての論争が続いてきた。その後の 1990 年代前後には、「神経多様性 (neurodiversity)」の用語が出現するとともに、自閉症の脳の特徴は「他の差異 (性、人種、その他の属性) と同じく尊重されなければならない個人間の差異にすぎない」(Ortega 2009=2015: 195) と主張する「神経多様性」運動が展開されるにいたった¹⁹。「神経多様性」は、自閉症の原因を先天的ないし不可逆的な発達によって形成された脳に求めるため、自閉症当事者やその家族などに免責を

もたらずほか、脳の個性にもとづいた新たなアイデンティティを付与するといった社会的帰結をもたらず²⁰。一方で、「脳の多様性」に対する批判としては、脳神経科学的な知識や説明によって、人間のアイデンティティが語りつくされることによる、思考や解釈の狭隘化の問題や、公に議論されるべき問題を個人の脳の問題に還元する私化の問題も指摘されている。このように「脳の多様性」をめぐるのは、正と負の二つの社会的帰結がこれまで指摘されてきた。

さらに、脳の可塑性という観点から「脳の主体」および「脳の多様性」をみた場合には、必然的に逆説的な状況もたらされる。これは、「脳の可塑性が神経多様性を説明するのに役立つのに対し、神経多様性の主唱者たちは、脳を基盤とした自閉症者アイデンティティの存在を根拠づけるために、神経的に多様な脳を均質化し、彼らの差異を極小化する傾向」

(Ortega 2009=2015: 205) として説明されるが、還元すれば、自閉症の個人間の脳の違い(個性)が矮小化されることが問題になる。これに関連して E・フェイン (2012) も、自閉症(アスペルガー症候群)の当事者の語りの考察を通じて「神経構造的自己(neurostructural self)」という概念を提起し、「神経構造的自己は、流動的で柔軟性があり、介入や最適化に開かれたものというよりは、固定的に定着したものであり、全域にわたって不変のものである」(Fein 2012: 29) と説明する。可塑的ではなく固定的なものとして想定されるという点で、「神経構造的自己」はオルテガのいう「脳の主体」にほぼ対応しているといえるが、同時にフェインは「神経構造的自己」に対置させるかたちで、ローズ (2001) が提起した「神経化学的自己(neurochemical self)」について言及している。それによれば、「神経化学的自己」は「神経構造的自己」とは対照的に、「無限の可変性や変化の期待に関連付けられた」

(Fein 2012: 30) ものである²¹。「神経化学的自己」は主に精神科薬物療法の文脈で論じられているものであるが²²、そこでは脳内物質のバランスの崩れなどのエラーによって、精神疾患が引き起こされるという思考が要となり (Rose 2001)、これはしばしば「神経化学的アンバランス(neurochemical imbalance)」と呼ばれ、人口に膾炙しているという。そして「神経化学的自己」の成立の背景には、脳を分子レベルで把捉する「神経分子のまなざし(neuromolecular gaze)」があり、生物学や化学などの最新の知見を神経生物学の領域に適用するアプローチに立脚した、人間の心身の認識の形成があるという (Rose and Abi-Rached 2013) ²³。「神経分子のまなざし」においては、人間心理・精神の一次的な「状態(state)」と恒常的な「特性(trait)」の区別が曖昧化し、脳内物質の量や比などの、分子のメカニズムという観点から捉えられるようになる (Rose and Abi-Rached 2013)。「状態」と「特性」の区別は、特定の状態を治療する目的をもつ「精神医学」と、人間心理の特性を捉える「心理学」の境界にも対応し、両者の境界も曖昧になっていく。すなわち、神経分子のまなざしのもとに成立する神経化学的自己においては、異常と正常の二項対立も連続性をもつようになる結果、潜在的な発症リスクをもつ万人が治療的介入の対象になり、リスクをいかにして統御・管理していくかが焦点となる。さらに、成育歴や過去のトラウマの影響などといった「心理的なもの」をめぐる位置づけも、脳に対する二次的な影響とみなされるようになり、あくまで脳内物質の状態と症状を結びつける精神医学的診断が最も正確であるとみなされる。

4. まとめにかえて

「脳的主体」および「神経構造的自己」と「脳神経化学的自己」においては、可塑性の想定という点では異なるものの、21世紀における脳神経科学をめぐる知識や技術が、人々の自己観や脳の捉え方に及ぼす影響力を強めているという基本的想定は共通している。また両者ともに、心理学的な知識や技術も一定の影響力を依然として有していると留保をつけつつも、心理学化に対する神経科学化の影響力の相対的な強化を重視し、基本的には両者が相即的に進展していくと説明している。ただし、このような心理学化から神経科学化への移行と、それに対する留保という説明の枠組みのなかでは、心理学化と神経科学化が、社会的・集合的な水準ではなく個人や自己といったミクロレベルの水準においてどのように作動するのか、とりわけ心理学と脳神経科学の影響が併存・拮抗・相互作用するような場合には、いかなる帰結がもたらされるのかという論点は、十分にカバーされていない。より具体的にいえば、人々が自らを再帰的に対象化して捉える場合、心理学的な解釈枠組みに依拠するのか、脳神経科学的な解釈枠組みに依拠するのか、あるいは別の解釈枠組みに依拠するのかなど、複線のかつ複合的な解釈の可能性に開かれているのであり、これらを分断するのではなく統合して捉えられるような理論的パースペクティブも要請されるといえるだろう。

注

¹ 「心理学化」以外の用語として、「心理主義化」(森 2000)や「心理化」(片桐 2014)といった語が使われることもある。また、Berger (1965)の論文では、「心理主義」に相当する「psychologism」の語が使用されており、心理学的なモデルを用いて社会や日常生活のなかの出来事や事物を解釈することが自明視される状況といった意味で用いられている。

² 片桐・樫村 (2011)は、私的領域の心理学化にくわえて、公的領域の心理学化を見出した点に、バーガーの議論の積極的な意義が認めている。ここでいう「公的領域の心理学化」とは、生産性などの組織的な問題が、労働者の意欲や気分といった心理的問題に起因するものとして扱われるようになる傾向を指す。

³ 精神分析的な無意識の概念が普及した背景要因としてバーガーは、人々が社会全体を見通す視野を失い、自身に及んでいる社会的な影響力も認識困難になったことを指摘し、個人の統御や知覚の範囲を超えた心的機構の存在を示す「無意識」の言葉で、自身の心理や行動を説明するようになったと述べている。さらに社会と個人の心理を架橋する理論構築という観点では、バーガーはジョージ・ハーバート・ミードの自我論を高く評価しており、ミードが社会学の学問領域を越えて心理学を考察するための視座を示した点にも、積極的な意義を認めている。

⁴ 「セラピー」という考察対象について、ベラーらは「臨床的な技法としてのセラピーではなくて、文化現象としてのそれ」(Bellah et al. 1985=1991: 137)および「心理的なトラブルをどう癒すかの方法としてではなく、ひとつの思想の様式として、ものごとの考え方としてのセラピー」(Bellah et al. 1985=1991: 137)として位置付けている。ただしベラーらは「セラピー」の個別の学派や技法、専門職の関与の程度等を完全に等閑視しているわけではなく、インタビューの事例記述のなかでセラピストが依拠していた心理療法の学派や技法に関する記述も散見される。しかし彼らの関心は、個別の心理療法がもつ特性や固有性にあるというよりも、「セラピー」が対人関係にもたらす影響にあるため、その区別が必ずしも重視されているわけではない。また、森は心理主義化を担う「心理学的知識」を「臨床心理学やカウンセリング、精神科医らが提供する知識のうち、素人(しろうと)が接触・受容する可能性が高いもの」(森 2000: 15)と定義し、一定の限定性を設けている。しかしながら、個人が「心理学的知識」をどのように取舍選択するのか、「心理学的知識」の種類や性質によって生起する「心理主義化」に違いはあるのか、といった論点については明言しておらず、その主要な関心は「自己コントロール」を強化するタイプの「心理学的知識」にあるといえる。

⁵ ただしギデنزはずべてのセラピーを無条件に肯定しているわけではなく、「自己の再帰的プロジェクトをただ自己決定として解釈するのであり、それによって人生を外的な道徳的配慮から切り離すことを追認し、強化」(Giddens 1991=2005: 204)するような、自己責任化を強化する、望ましくないセラピーも存在するという留保をつけている。

6 平井 (2015) は、薬物事犯者に対する処遇としての認知行動療法 (Correctional Cognitive Behavior Therapy on Drug treatment : CCBTD) の事例研究から、心理学的な技法の一つである CCBTD が、「社会的なもの」を無視するのではなくむしろ、『『社会的なもの』を重視し活用したうえでそれを自己コントロールの対象 (“対処”されるべき経験) に設定するような——『『社会的なもの』の自己コントロール』を要請するような——役割期待 (平井 2015: 232) を有する性質があったことを示している。

7 文化人類学者の A・ボロヴォイ (2005) は、アルコール中毒の夫を持つ女性が、「共依存」を美德とする日本の文化的背景のもとで、抑圧的な立場に陥っていることを明らかにしたうえで、精神療法的な言語が彼女らに「共依存」の価値観を問い直す契機となったことをフィールド調査から示している。「共依存」から脱する際に精神療法が寄与するという論点は、ギデンズ (1992=1995) が「共依存」の精神療法に「再帰的自己自覚的な指示」(Giddens 1992=1995: 137) を読み込んだ議論にも通底するが、ここでは「心理学化」が「社会的なもの」に起因する問題の解決に寄与したという点に注意する必要がある。

8 デ・ボスの心理学化の定義のなかには「学術的なもの」の語が含まれているが、これは彼が「日常生活の学術化 (the academization of everyday life)」と呼ぶ概念に関連する。「日常生活の学術化」は、専門知や科学知に対する人々の依拠の程度が強まる傾向を指し、「モダニティにおける主観性は、知識と不可分に結びついている。すなわち、モダニティにおける主体は科学者と共にあるため、私たちが自分自身や世界を見る際に天空の神の眼差しを想像する必要はなく、科学という有利な視座を取り入れる」(De Vos 2013: 46) と説明される。したがってデ・ボスの「心理学化」概念は、「日常生活の学術化」を構成する一つの潮流として位置付けられていることに留意する必要がある。

9 精神や心理を対象とする複数の学問知や技術のなかに「心理学」を相対的に位置付けるという点で、デ・ボスの「心理学」概念は、ローズ (1998) がいう「psy-の接頭辞の付く学問 (psy disciplines)」との関連性が強く、デ・ボスも「psy-の接頭辞の付く科学 (psy-sciences)」の言葉を用いており、これには心理学 (psychology) や精神医学 (psychiatry) のほか、神経心理学 (neuropsychology) や精神薬理学 (psychopharmacology) も含まれる。

10 逆にいえば、感情や思考、言語を有している以上、人々は何らかの心理学的な知を程度の多寡はあれ参照している、換言すれば常時「心理学化」されているため、そこから「心理学化」されていないような状態を析出することは不可能ということになる。なお、デ・ボスはクリストファー・ラッシュの私化論を再評価するなかで、それが心理学化によって失われた「社会」を再要請するような単純なものではなかったことを指摘する。ラッシュは、「公共圏が客観的な社会問題のみに排他的に関与しているわけではなく、そこには精神や主観といった領域が浸透している」(De Vos 2013: 86) ことに自覚的だったほか、彼の問題関心の中心は「苦しみの社会的起源 (social origins of the suffering)」が覆い隠されることにあった。そのためラッシュは、「苦しみの社会的起源」を明らかにするための知として精神分析に依拠したのであり、デ・ボスもその立場を肯定している。したがってラッシュは、「心理学化」からの「脱却」という単純な主張をしているのではなく、人々が心理学化されることは必然であるという前提に立ったうえで、そのなかで苦しみの社会的起源を示す精神分析を要請した——これには「心理学」と「精神分析」の差異化も伴う——といえる。

11 デ・ボス (2013) は、ルネ・デカルトの方法的懐疑を引き合いに出しつつ、近代合理主義における観察者と被観察者の問題は、神の存在でもって探求が打ち止められていたと説明する。その後、近代科学が興隆するにつれて、もはや観察者の存在論的基盤を保証するものとして神を位置付けられなくなった結果、心理学をはじめとする科学的な知への依拠が進行した。そのため「心理学はまさに当初から心理学化を伴っていた」(De Vos 2013:8) のであり、心理学は自分自身を観察するための術や正当性を担っていたという。

12 脳神経科学の学問的ルーツおよび展開のプロセスについては、ローズとアビ・ラチド (2013) に詳しい。

13 ローズとアビ・ラチド (2013) では、脳神経科学の成立および展開についての歴史、実験などを通じて科学知識が産出されるプロセス、「社会的脳」と脳に配慮し再形成を試みる個人の問題、「反社会的脳」と司法および責任能力をめぐる問題など、さまざまな論点が広範囲にわたって議論されている。

14 ヴィダル (2009) によれば、「脳性」に関連する思考自体は決して新しいものではなく、精神を身体に還元させるという広い文脈では、アリストテレスやルネ・デカルトなどの思想にまで遡るといえる。

15 テレビや新聞、書籍などの一般向けのメディアにおいては、脳が人間の行動、知覚、考え方、選択、能力等に及ぼす影響に関する知識や情報が流布している。たとえば「脳トレ」などの脳を鍛えたり機能を向上させるための情報やツールの流行 (Rose and Abi-Rached 2013) や、人間の性向や特性の「真理」や「本性」を可視化する技術として、脳機能イメージング技術が米国において熱狂的に迎え入れたこと (Dumit 2004, Joyce 2008) が具体例として挙げられる。

16 19 世紀末から約 1 世紀以上にわたって続いた、脳の不変性・不動性を想定する科学的知識の展開から、1970 年代以降に電気生理学と分子神経生物学の間で起こった脳の可塑性をめぐる論争については、リース (2010) に詳しい。なお、「可塑性」は「新たな神経組織とそこで生じる形態変化を誘発する、脳

の継続的な胚発生のポテンシャル」(Rees 2010: 151)を指す。神経科学者のなかには、脳の可塑性に対して強い反対を表明する者が多かったというが、それは科学的な妥当性というよりは、可塑性を認めることが、19世紀末以降信奉されてきた人間観——発達の完了でもって不変的な脳に到達するという想定——の否定につながることに對する、強い憤りや抵抗感があつたことを、リースは示唆している。

¹⁷ 脳に可塑性をもたらす身近な技術の最たるものとして、ローズとアビ・ラチド (2013) は向精神薬を挙げているが、これ以外にも、脳に働きかけるための技術を指導する教育やレクチャー、民間カウンセリングなども挙げている。

¹⁸ シルバーマンとプロスコ (2007) は、米国における過去 50 年の自閉症研究の発展の中核を担ったのが自閉症の当事者や両親、権利擁護団体であると指摘し、彼らを中心に研究資金の獲得や臨床研究ネットワークの構築、治療法の普及、自閉症理解のパラダイムシフトがもたらされたことを明らかにしている。

¹⁹ シルバーマン (2011) も自閉症の当事者および関係者らを対象としたフィールドワークを通じて、脳の違いを肯定的に承認する社会を標榜する「神経多様性」の必要性が訴えられていた様子を詳細に記述している。

²⁰ 立岩真也 (2014) は、従来の社会学には、人々が抱える諸問題の原因を個人に帰責させるのではなく、その解決を「社会」に求める共通認識があつたことを指摘する。そのため、個人の問題を当人の脳、すなわち生物学的要因に帰責させることに對しても、反対の立場が表明されることも多かつた。しかし今や、脳に関する知識や説明に習熟した当事者らが、自身の抱える問題は「社会」の次元で解決可能なものではなく、脳に起因する先天的なものであると主張するようになりつつあることに鑑みると、再考を余儀なくされる (立岩 2014)。また、ローズとアビ・ラチド (2013) も「社会還元主義

(socioreductionism)」という言葉を用いて、精神や心の問題の発生源を「社会」のみに求めるべきではなく、神経学や神経化学など他の学問の知見も含めた、複合的なパースペクティブが必要であると指摘している。

²¹ フェイン (2012) は、学校教育の場で、脳神経科学的・精神薬理学的な介入による改善可能性に開かれた「情緒障害のある学生」とみなされるか、「神経構造的自己」に相当する「アスペルガー症候群の学生」とみなされるかによって、学生たちの自己観や自身と脳の関係性をめぐる知識、学校で受ける教育内容や期待される役割が異なっていくことを、フィールド調査を通じて明らかにしている。

²² 脳神経科学の知識および表象が健康や病のイメージにもたらした影響は、精神医療領域においても顕著である (Pickersgill and Keulen 2012)。特に統合失調症とうつ病においては、脳のイメージング技術によって疾患カテゴリーが再定義され、脳神経科学的な基盤を持つ疾患として捉えられるようになったほか、「脳障害の世界的負荷 (global burden of distress)」の問題としても議論されるようになった

(Pickersgill and Keulen 2012)。さらに後述する精神科薬物療法以外の、脳を対象とする治療技術として、近年では脳深部刺激療法 (Deep Brain Stimulation: DBS) の適用が社会科学的な考察対象として研究されている。B・ムートゥ (2011) は、フランスにおけるパーキンソン病および治療抵抗性強迫性障害 (Obsessive Compulsive Disorder: OCD) 患者に対する DBS の適用が、患者の自己定義にもたらす影響を考察している。特に後者の OCD 患者については、病の原因を過去の対人関係やライフイベントが引き金となって OCD を発症したという当初の解釈が、DBS との接触を通じて変容するプロセスに焦点が当てられる。患者は当初、生物学・心理学・社会的要因のなかから、最も自身の状態を説明するのに適した説明を、時に折衷的に選択するのであるが、これを変容させる契機は「脳化 (cerebralization)」とよばれる。「脳化」に付随する病についての解釈の変化として重要なのは、「意志にもとづく行為」と「意志にもとづかない (=身体 (脳) に起因する) 行為」の区別であり、患者にとって「OCD は身体の内にはあるが、彼らの主体的な行為 (subjective activity) としてあるわけではない」(Moutaud 2011: 95) というように解釈される。すなわち、治療対象としての「脳」を外在化して捉え、切り離していく思考や実践が、他の病の原因論における生物学的解釈の相対的な重要性を高め、患者の自己観やアイデンティティを変容させていくプロセスが、ムートゥの研究から看取することができる。

²³ ローズとアビ・ラチド (2010, 2013) によれば神経分子のまなざしの誕生は 1960 年代に、生物学や化学、生物物理学といった「脳・精神・行動を探究する思考・実践・知識の異なるスタイルを『ハイブリッド化』することや、神経システムの領域における還元主義的で主に分子を対象とするアプローチの導入が、慧眼であり有用なことが判明した」(Rose and Abi-Rached 2010: 31) できごとと端を発するとい

文献

Bellah, R. N. et al., 1985, *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, Berkeley: University of California Press. (=1991, 島藺進・中村圭志

- 訳『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房.)
- Berger, P. L., 1965, "Toward a Sociological Understanding of Psychoanalysis," *Social Research*, 32(1): 26-41.
- Borovoy, A., 2005, *The Too-Good Wife: Alcohol, Codependency, and the Politics of Nurture in Postwar Japan*, California: University of California Press.
- De Vos, J., 2013, *Psychologization and the Subject of Late Modernity*, London and New York: Palgrave Macmillan.
- Dumit, J., 2004, *Picturing Personhood: Brain Scans and Biomedical Identity*, Princeton, Princeton University Press.
- Fein, E., 2011, "Innocent Machines: Asperger's Syndrome and the Neurostructural Self," M. Pickersgill and I. V. Keulen eds, *Sociological Reflections on the Neurosciences*, Bingley: Emerald, 27-49.
- Foucault, M., 1988, *Technologies of Self: A Seminar with Michel Foucault*, Massachusetts: University of Massachusetts Press. (=2004, 田村淑・雲和子訳, 『自己のテクノロジー—フーコー・セミナーの記録』岩波書店.)
- Gazzaniga, M. S., 2005, *The Ethical Brain*, New York: Dana Press. (=2006, 梶山あゆみ訳『脳のなかの倫理—脳倫理学序説』紀伊國屋書店.)
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, 『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- 平井秀幸, 2015, 『刑務所処遇の社会学—認知行動療法・新自由主義的規律・統治性』世織書房.
- Joyce, K. A., 2008, *Magnetic Appeal: MRI and the Myth of Transparency*, New York: Cornell University Press.
- 片桐雅隆・榎村愛子, 2011, 「『心理学化』社会における社会と心理によせて (<特集> 「心理学化」社会における社会と心理)」『社会学評論』61(4): 362-365.
- 片桐雅隆, 2014, 「『社会的なもの』と『心的なもの』—心理化をとおして見る自己と社会」『心理学評論』57 (3) : 357-371.
- Lasch, C., 1979, *The Culture of Narcissism: American Life in an Age of Diminishing Expectations*, New York: Warner Books. (=1981, 石川弘義訳『ナルシズムの時代』ナツメ社.)
- 森真一, 2000, 『自己コントロールの檻—感情マネジメント社会の現実』講談社.
- Moutaud, B., 2011, "Are We Receptive to Naturalistic Explanatory Model of Our Disease Experience? Applications of Deep Brain Stimulation to Obsessive Compulsive Disorders and Parkinson's Disease," M. Pickersgill and I. V. Keulen eds., *Sociological Reflections on the Neuroscience*, Bingley: Emerald Group Publishing Limited, 179-202.
- Ortega, F., 2009, "The Cerebral Subject and the Challenge of Neurodiversity," *BioSocieties*, 4(4): 425-445. (=2015, 野島那津子訳, 「脳の主体と神経多様性の問題」『現代思想』43(10): 190-212.)
- and F. Vidal., 2011, "Approaching the Neurocultural Spectrum: An Introduction," Ortega, F. and F. Vidal eds., *Neurocultures: Glimpses into an Expanding Universe*, Frankfurt am Main: Peter Lang, 7-27.
- Pickersgill, M. and I. V. Keulen, 2011, "Introduction: Neuroscience, Identity and Society," M. Pickersgill and I. V. Keulen eds., *Sociological Reflections on the Neuroscience*, Bingley: Emerald Group Publishing Limited, xiii-xxii.
- Rees, T., 2010, "Being Neurologically Human Today: Life and Science and Adult Cerebral Plasticity (an Ethical Analysis)," *American Ethnologist*, 37(1): 150-166.
- Rieff, P., 1966, *The Triumph of the Therapeutic: Uses of Faith after Freud*, New York: Harper and Row.

- Rose, N., 1998, *Inventing Our Selves: Psychotherapy, Power, and Personhood*. Cambridge: Cambridge University Press.
- , 1999, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self (Second Edition)*, London and New York: Free Association Books.
- , 2001, “The Neurochemical Self and its Anomalities,” R. V. Ericson and A. Doyle eds., *Risk and Morality*, Toronto: University of Toronto Press, 407-437.
- and J. M. Abi-Rached, 2013, *Neuro: The New Brain Sciences and the Management of the Mind*, Princeton: Princeton University Press.
- Rubin, B. P., 2009, “Changing Brains: The Emergence of the Field of Adult Neurogenesis,” *BioSocieties*, 4(4): 407-424”.
- 崎山治男, 2008, 「心理主義化と社会批判の可能性——感情を欲望する社会／社会を欲望する感情」崎山治男ら編, 『〈支援〉の社会学——現場に向き合う思考』163-184.
- 佐藤雅浩, 2013, 『精神疾患言説の歴史社会学——「心の病」はなぜ流行するのか』新曜社.
- Senett, R., 1977, *The Fall of Public Man*, New York: Alfred A. Knopf. (=1991, 北川克彦・高階悟訳, 『公共性の喪失』晶文社.)
- Silverman, C. and B. P. Brosco, 2007, “Understanding Autism: Parents and Pediatricians in Historical Perspective,” *Archives of Pediatrics and Adolescent Medicine*, 161: 392-398.
- Silverman, C., 2011, *Understanding Autism: Parents, Doctors, and the History of a Disorder*, Princeton: Princeton University Press.
- 立岩真也, 2014, 『自閉症連続体の時代』みすず書房.
- Vidal, F., 2009, “Brainhood, Anthropological Figure of Modernity, *History of the Human Sciences*, 22(1): 5-36.

榎原 克哉 (くしはら かつや) 東京通信大学 情報マネジメント学部 助教